



## 「英語 de 数学」

大館市教育委員会 教育長 高橋 善之

その授業のきっかけは、ひょんなことだった。下川沿中3年生たちの学力・生活・人間性ともすごいよという評判は聞いていた。実際に授業を観てみると、予想よりもさらにハイレベル。その知力・集中力・発表力・気迫・協働力に圧倒された。これ程のレベルの中学生の授業は初めてであった。その数日後だったと思うが、とある居酒屋での帰り際、偶然、小林一彦校長と出くわした。下中の職員の懇親会とのこと。参観した授業の感動もあり、誘われるままに？合流した。一関教頭も含め先生方がお揃いの下中ポロシャツを着て盛り上がっていた。授業談義の中で「あのレベルだったら、英語で数学の授業ができるよな」という話に発展した。小林校長もけしかける。20歳代の米澤先生（数学）と水沢先生（英語）が、「面白そう。やってみようか！」と即応した。

その授業「英語de数学」は二学期に実現した。二次方程式の学習を教師も生徒も英語だけを使いながら進める授業である。これがまた、すばらしい出来であったし、11月にはさらにレベルアップしたパートⅡを公開してくれた。これは、「学融合反応」だなどと思い至った。「異教科，TT，高質の生徒集団」などが有機的に融合したことで、化学変化が起こり、エネルギーが発生し、異次元の授業が生み出されたのである。その授業を参観された佐藤北教育事務所長をはじめ、高校教育課を含む複数の指導主事からも高い評価をいただいた。今後、県教委が推進を企図している「英語力を育成する教育モデル」となるであろう。これが県とか市教委による研究委嘱とかではなくて、居酒屋に端を発した若手教員の自主チャレンジであったことが、大館らしくて、二重にうれしい！



## 教師も「一人学び」と「学び合い」

大館市教育研究会 会長 石岡 ひな子

市教研の役目により、第2回総合研を巡回し授業を参観させていただいた。印象に残る授業があった。これぞ秋田型といわれる展開で、子どものみならず参観する者の思考もぐっと捉えて離さない授業であった。

まず、解決したくなる一時間を貫き切る課題提示があり、発問も手短。早速「一人学び」を保証し、教室空間には集中する静けさだけが漂う。既習事項を手がかりにどんどん自分で考えを進めている。普段から様々な教科・場面で鍛えているせいか躊躇する様子も微塵にない。逆に支援を要する子にはすかさず机間指導が入る。次に、みんなで解決する段階の「学び合い」が始まるや否や、われ先にと手が挙がる。期待される考えのみならず、意図的指名で「はてな」、あるいは「はまりやすい落とし穴」の考えも取り上げる。これに対し、支持や異なる考えを子どもたち自身が継いでいく。発言できなかった子らの溜息まで聞こえてくる。ここで次の授業巡回時間となり、後ろ髪を引かれる思いで教室を出た。別の日、同じ学級の専門監授業でTTとして担任が入った映像を見せていただいた。

いずれの際も担任は終始落ち着いて、立ち位置を考え全体の状況をよく把握していた。一部の勢いの強い発言に引きずられず、一人一人を生かしつつ集団の学びの質を上げていた。教室には課題解決に向かう熱気と活気が溢れていた。総合研ではこうした素晴らしい提示授業を手がかりに各部会で協議が充実したと想像する。授業交流を通して、教師として自己を磨きお互いに授業力を高め合うという市教研の使命が果たされていたと信じたい。